

閨怨

王昌齡

閨中の少婦愁を知らず

春日妝を凝らして翠樓上る

忽ち見る陌頭楊柳の色

悔やまば夫婿をして封侯竟めしむ

【作者】王昌齡(七〇〇年?七五六年?)・盛唐期の詩人。字は少伯。京兆の人。七言絶句に秀で、辺塞詩で有名。

【通釈】山西省太原に本籍を持ち、京兆・長安に生まれたらしい七二七年に進士となり、祕書省の校書郎から七三四年に博学宏詞科に及第して汜水(河南省の県尉となつたが、奔放な生活ぶりで江寧の丞・竜標(湖南省)の県尉に落とされた。その後、七五五年、安祿山の乱の時に官を辞して故郷に帰るが、刺史の閻丘暁に憎まれて殺された。後に閻丘暁は、安祿山軍の侵攻に対し、唐側の張巡を救援しなかつた罪で、唐の張鎰に杖殺された。この時、閻丘暁は「親がいるので、命を助けて欲しい」と言つたが、張鎰は、「王昌齡の親は誰に養ってもらえばいいのか?」と反論し、閻丘暁は押し黙つたと伝えられる。

【語釈】\*閨怨…妻がその夫と別れている怨みの詩。 \*閨中…ねやのうち。閨房。女性の部屋。 \*春日…春のどかな日に。 \*翠樓…女性のいる建物。青楼。 \*陌頭…路上。道端。路傍。 \*楊柳色…ヤナギの青々とした色。 \*夫婿…おつと。むこ。 \*覓封侯…諸侯になることをもとめる。手柄を立てる。立身出世を求める。

【通釈】閨房にいてかわいがられてはいる若妻には、世の中の愁いというものが分からない。春のどかな日に、よそおいを凝らして、女性のいる建物に上つて、気楽に過(こ)している。道端の楊柳の青々とした色を見て、にわかに気付いた。夫に、手柄を立てて、立身出世するようにしむけたことを悔やむ。悔やまれることは、夫に、手柄を立てて、立身出世するようにをしむけたことであつた。